

新川敏光氏の書評を駁す

井上 雅雄

「週刊読書人」1998年2月27日号において、拙著『社会変容と労働』（木鐸社、1997年11月刊）に対する新川敏光氏の書評が掲載された。が、遺憾ながらその内容は著者としておよそ首肯しがたいものであり、私はその旨を「週刊読書人」編集部に伝えた。同編集部は、私の意向に応答して同紙上で反論の機会の提供を申し出てくれたが、その紙幅は、書評と同じく最大400字詰原稿用紙4枚と限られたものであった。書評への反論という文章の性格からして、私はその与えられたスペースでは到底意を尽すことができないと考え、同編集部の好意ある申し出を断り、ここに一定の紙幅を得たのを機会に反論を試みるゆえんである。

1

拙著は、「1970年代初頭の第一次労戦統一運動の分析を踏まえて、『連合』の成立に帰着する第二次労働戦線統一運動の内的論理を、主に全民労協の結成に至るプロセスに焦点を絞って明らかに」し、「このことをとおして、総評型労働組合運動の終焉の根拠とその意味を、70年代後半以降の日本社会の変容の歴史的コンテクストのうちに探る」（8頁）ことを課題としたものである。

ところがこの評者によれば、「本書は、わが国における階級的労働運動の衰退と協調的労働運動の台頭を、労働者の意識変容から説明

しようとする試みである」という。なによりもまず本書のこの性格づけがまちがっている。私は先に設定した課題に即して、第1章から第4章までを連合の結成＝総評の解体の労働運動内の論理を摘出することに充当し、その上でとくに「総評の終焉とはその運動の内的論理によるばかりではなく、その運動が依拠してきた社会的基盤の崩壊によるものでもあった」から、その「基盤の崩壊の根拠にまで考察の視野を拡げ」（9頁）る必要があるとして、「労働者と国民の社会意識と価値観の変容」の分析、「それを必然ならしめた社会的・経済的根拠」として「社会階層間の経済的格差と社会移動の実態」「かつそれらに果たした戦後教育の機能」の分析、さらに「社会変容の凝集的・象徴的表現として」80年代初頭の「大衆の消費行動の分岐の意味について（の）考察」（16頁）などを、一括して第5章として充当したのであった。

しかもこの第5章において注意すべきは、「広い社会的パースペクティヴ」のもとでの「これら一連の作業は、つまるところ日本社会における『階級』の实在性を問うことによって戦後日本社会が到達した歴史的地平が社会構造の点からみていかなる性格をもち、それがどのような社会的・歴史的意味をもつものであるかを吟味するものにほかならない」（17頁）とその意図を明示した上で、丹念な解析をとおしていささか大胆ながら、古典的

・伝統的な意味での「労働者階級の終焉」という事実を析出し、それを「日本社会の変容の象徴的な表現」(384頁)と結論づけたことである。

このような本書の内容が、なにゆえに評者のような「労働者の意識変容から説明しようとする試み」ということになるのであろうか。この評者によれば、第1章から第4章までを集中して充当した「連合」結成の労働運動内の論理の解析は、その視野から完全に欠落している。そればかりではない。この点について評者は、より刺激的に「『連合』結成、その背後にある労働組合の社会的影響力の衰退といった現象に関しても、労働者の意識変化を指摘して事足りる問題ではなく、政治構造や権力関係、経済構造と蓄積体制などを政治学的経済学的に分析する必要がある」と述べている。これはほとんど言いがかりとすべきものである。私は、およそ「労働者の意識変化を指摘して事足り」としたわけでもなければ、「経済構造と蓄積体制」など「経済学的」「分析」を欠落させたわけでもない。本書の内容をそのように矮小・歪曲化した、それは評者の勝手な誤読によるものである。

すなわち第2章から第5章の冒頭にかけての諸章において、私は「石油危機を契機とした底の深い不況とその後の低成長という日本経済の蓄積軌道の転換」(82頁)を、今次労働統一運動の直接の要因として繰り返し指摘した上で、それが労働組合の方針と政策および組合リーダーの認識と思想と行動にどのように影響を与え、いかにそれらを転換せしめていったのかを立ち入って分析している。改めて指摘するまでもないが、マクロ的な「経済構造と蓄積体制」の「経済学的分析」が、そのものとして重要なのではない。それらが、いかに組合の理念と政策そして組合リーダーの行動に作用し、それらの転換を迫ったかの分析こそが本質的なものであって、いかにマク

ロ経済分析を精緻に行おうと、その組合政策転換への影響を具体的に分析しなければ、意味をなさないというべきであろう。

この点については、評者のいう「政治構造や権力関係」の「政治学的分析」についても同じである。「権力関係」(これは具体的に何を言おうとしているのか?)の分析はいざ知らず、労働統一をめぐる政治的關係は、とくに総評の労働統一運動でのイニシアティブをとろうとする動きに即して触れているのであって、「政治構造」そのものの分析はそれが労働統一の主要要因ではないから手薄ではあるが、本書を注意深く読めば、労働統一と総評の運動転換とにかかわらせて触れていることが読み取れるはずである。その上でなおそのような「政治学的経済学的分析」を求めるといふのならば、およそ如上のコンテクストを欠くかかる「分析」は、そもそも本書が設定した主題の解明とは無縁であるといわなければならない。

2

他方、評者は本書第5章を要約しながら次のように述べている。「著者」は経済的格差や社会移動の研究をとおして「『豊かで平等な社会』としての日本象を描く。著者によれば、こうした『平等化社会』を出現させたのは自己努力であり、その原動力は『出自からの脱却による社会的認知の欲求』と『豊かな生活への願望』である。」「普遍的とも思われるこうした欲望が、日本において著者の描く『自助や個人主義志向に基づく平等化社会の実現』へと結実したとするなら、その条件とは何であったのか」「個人主義的志向が強ければ強いほど、他の条件が同じであれば不平等化が進むと考えるのが普通であろう。日本における勤労意欲や競争意識の働く場や制度の構造に言及することなく、個人主義概念を持ち出すのはいささか唐突に思われるし、それが『組織されたミドルクラス』という概念

とどのように結びつくのか、必ずしも明確ではない」と。

ここにはいくつもの無理解と誤読とがある。まず労働者にとって「出自からの脱却」も「豊かな生活への願望」(ちなみに評者はこの二つの現象を同じ事だとするが、言うまでもなく両者は厳密に位相を異にする)も「普遍的な欲望」なのではない。例えば英国の伝統的労働者階級にとっては、長い間前者は階級からの離脱として裏切り行為ととらえられてきたし、後者は金銭やモノへの執着として恥ずべき行為と考えられてきたのであって、この点は日本でも戦前の労働者には部分的にみられたことであった。そしてこれらのことは、本書において戦後の日本の労働者の価値観と行動様式の特質を浮き彫りにするためにとくに力点を置いて説明したものであり(373, 386頁を見よ)、率直に言って私は評者の読解力を疑わざるをえない。

次に、日本においてなによえに平等化社会が実現したかについては、基本的には高度成長による経済水準の底上げと、そのもとでの階級的障壁を内包しない教育制度を媒介とした労働者の社会的流動性の高さによるものであることを、本書で立ち入って実証しておいた。その上で評者が「個人主義的志向が強ければ、他の条件が同じであれば不平等化が進む」と述べている点についてであるが、これはしかし奇妙な議論というほかはない。「他の条件が同じであれば」とはどういうことか。「個人主義的志向」以外の一切の条件を「同じ」にするということなのか。それではそもそも議論はなりたたない。特殊な条件を除くとしても、少なくとも経済発展度、階級構造の強さ、教育制度のあり方などの経済的社会的条件によって、所得分配の平等化のレベルが異なるのは当然のことであり、それは国ごとにはむろんのこと一国内においても歴史的に認められる現象である。だからこそ私は、本書でこれらの条件を各々やや立ち入って考

察したのであった。日本の、戦前に比する戦後の所得分配の平等化の前提条件として、戦後改革をはじめとする戦時的戦後的条件に触れておいた(349-350頁)のも、このような文脈においてであった。この点についても、私は評者が正確に本書を読んだのか疑念を禁じえない。

他方、評者は「日本における勤労意欲や競争意識の働く場や制度の構造(これは何をいおうとしているのか?)に言及することなく、個人主義的概念を持ち出すのは唐突」というのであるが、私は評者自身が引用しているように日本の労働者の「倫理的とまで形容しうる仕事への自己投入、強い昇進志向」をその意識調査をとおして析出したが、それらが実際に「働く場」そのものについては分析してはならず、与件としている。指摘するまでもない。労働者の職場の実態に言及せよというこの要求は、それ自体丹念な調査を要する実証研究であり、本書の主題の域をはるかに超えるものだからである。そして「個人主義的概念を持ち出すのは唐突」という点に関して、そもそも「個人主義」も「自助」も各々本書で意識調査から析出した日本の労働者と国民の価値観・行動様式の特質であり、前者は「組織されたミドルクラス」という労働者の社会的性格についての暫定的規定を導出する概念として、後者はとくに福祉国家政策による平等化社会スウェーデンと対比して特徴づけた日本の平等化社会のメンタル・ファクターとして用いたものであり、それは本書で充分論証したものである。これらの文脈を全く無視して「個人主義」を「唐突」に「持ち出」したのは、そもそも評者自身なのであり、いわれなき謗りといわざるをえない。

さらに「それが(この指示代名詞が具体的に何を指しているのか不明だが)『組織されたミドルクラス』とどう結びつくのか」と評者は難ずるのであるが、すでに関説したように「組織されたミドルクラス」とは意識調査

から導いた日本の労働者の社会的性格に私が与えた暫定的規定であり、本書ではその規定のすぐ後に「しかし日本の労働者が『組織され』ているとはいえ、果たして厳密な歴史的・社会的存在としてのミドルクラスといるであろうか。この点については国民意識の変容の考察を踏まえた上で、改めて検討する」(323頁)と述べて、わざわざ留保したものである。私は、それを最終的には村上泰亮の造語にかかる「新中間大衆」として実証的に性格づけた上で、このことの含意を労働者階級を含む伝統的な社会階級の終焉と規定したのであるが、このように暫定的・中間的規定と私がわざわざ断った「組織されたミドルクラス」を、評者はなにゆえにあえて何かと「結びつ」けようとするのか。私にはここでも文脈を完全に無視した評者の真意が理解できないのである。

3

最後に、本書に対する新川氏の評者としての積極的な批判点と目される二つの論点に回答しておこう。

第1は、本書の意識調査が「限られた時点」の「協調的」組合のものであり、「時系列的体系的分析」ではない、という点についてである。まず結果として「協調的」組合となったが、大手組合の労働者の意識調査を取り上げたのは、本書でとくに中小企業労働者のそれと対比して注記したように、それが日本的賃金・雇用慣行の確立を基礎に「日本の労使関係を規定する規範性を有」し、「その労働者の意識と態度は、日本の労働者のそれ全体を代表し、典型像を構成すると考え」(345頁)だからであった。1980年前後の意識調査として当時の動労などのものがないわけではないが、言うまでもなくこの組合は国鉄解体のプロセスをとおしてドラスティックな路線転換を行っており、転換前の「戦闘的」な意識調査は、不適切と判断し取り上げなかった。ま

た特定時点の調査ではないかという点に関しては、できうる限り時系列を追うようにつとめたが、労働者の意識・価値観の多様な局面を照射することに傾注したために、時系列的比較に徹底さを欠く結果となったことは否めない。この点に関しては批判を甘受したいと思われる。

第2は、私が「80年代初頭の日本社会は歴史上所得格差が最も縮小した」と述べたのに対して、評者が埋橋考文『現代福祉国家の国際比較』に依拠して「再分配後所得」ではその時期アメリカ、スイスに次いで日本は「不平等性が高い」と指摘した点である。私は本書で平等化の指標の一つとして再配分前の所得のジニ係数を取り上げた。それは租税や社会保障負担の制度・構造・政策が大きく異なる各国間で、再配分後の所得を比較することはあまりに危険度が高く精度を保障できないと考えたからである。私は埋橋氏の著書をむしろ知っていたが、氏自身再配分後所得の比較は「比較ベースが異なる」ので「注意を要する」(同86頁)と断って多くの留保をつけていたものであった。私が、本書でも指摘したように、もともと再配分前の所得でさえその国際比較には一定の危うさを伴うのに、さらに危険度の高い再配分後所得の国際比較などはすべきでないと考えたのは当然であろう。が、より注意すべきは、再配分前の所得に関する限り、埋橋氏自身、私も用いたL I S調査を基礎に日本は「かなり平等度が高い」(同)と私と同じ認識を示した上で、日本は所得分配が平等であるがゆえに「再配分効果」が他の国に比べて「かなり低」く、「そのため、再配分後所得分配の不平等度は、スイス、アメリカに次いで高くなっている」(同88頁)と指摘していたことである。要するに、日本にあっては所得分配の平等度の高いことが再配分効果を弱め、再配分後所得の不平等を結果したのであり、両者は一つの因果連鎖ないし同じメダルの表と裏の現象であるにすぎな

い。このことは所得格差分析のほとんど常識に属する事柄なのであって、私が本書であえて埋橋氏の著書を取り上げたり、自己の主張を変えたりしなかったゆえんである。評者はなぜ埋橋氏の主張の一部を、その文脈を無視して殊更に掲げて、あたかも私の主張がまちがっているかのごとくに難ずるのか。このアンフェアな態度もまた私にはおよそ理解できないことである。

4

このほか評者は、本書に対して「フェミニズムを含む多くの企業社会批判に十分答えていない」とか、「今日」の「平等化社会の変容をどのように捉えているのか」と批判するのであるが、前者については、そもそも本書は日本の企業について言及することはあっても企業社会分析を主題とするものではなく、いわんやその批判に「答え」る義務はいささかもないということ、後者については、それが終章を読んだ上での発言なのか理解に苦しむが、そこで十分に展開しているので再読・吟味されたいと述べるに留めよう。

私は、この評者の書評を読み、深い落胆を禁ぜざるをえなかった。評価対象の正確な把握に基づく射的批判とはおよそ程遠く、書評能力を問わざるをえないほどにあまりに外在的・超越的かつ自己中心的にすぎるからである。書評は、改めて言うまでもないことではあるが、著者の主張に潜む思わざる欠落や論理の齟齬、課題と論証との整合性などについての的確かつ適切な指摘がなされるならば、著者がそこから多くのものを学ぶことができる性格のものである。が、私にとってこの書評は、労働者意識の時系列分析が手薄であるという一点を除けば、何一つ学ぶことができなかつたばかりでなく、むしろ無理解と作為的とさえ疑わせしめる曲解に基づく非難に憤りを喚起させる類いのものであった。

一つの作品をめぐるこのような大きなギャップがなにゆえに生ずるのか。ディシプリンや価値観の違いあるいは世代の差異を超えた、何かより重大な原因があるのか、私は考えあぐねている。

(1998年3月14日)